

DATA
WATCH

拡大する長寿リスク

保険・年金研究部門 中嶋 邦夫
nakasima@nli-research.co.jp

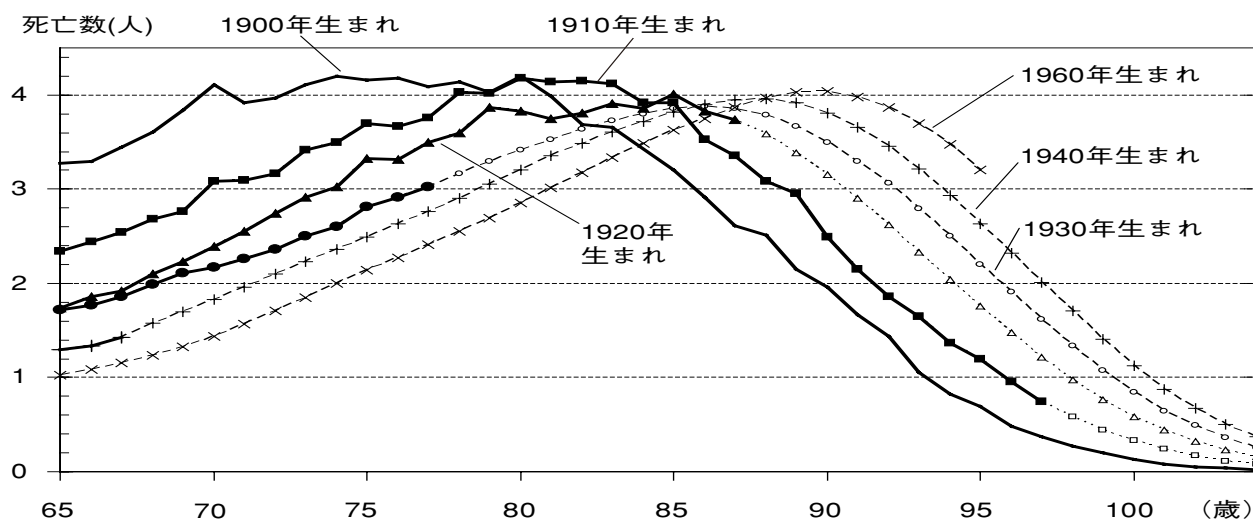
日本が「世界一の長寿国」と呼ばれて久しい。将来についてはあくまで予測だが、グラフを見ると、世代（生まれ年）が進むにつれて線が右にシフトしており、長寿化の進行が読み取れる。表でも、「死亡数が最多となる年齢」「平均死亡年齢」ともに、世代を追うごとに上昇している。

この「世代ごとに進む長寿化」の影で、「世代内の長寿リスク」が拡大している。表の「死亡数最多年齢での死亡数」を見ると、将来予測が基礎データの大半になっている1940年生まれを

除いて、この人数が減少している。一方、死亡年齢のばらつき具合を示す「標準偏差」は、増加傾向にある。これらの数値は、「平均で何歳まで生きるという情報が役に立ちにくくなり、いつ死亡するのかを予想しづらくなっている」ことを示している。この状況は男性で顕著だ。

「世代内の長寿リスク」への対処方法には、終身年金やリバース・モーゲージなどがある。これらはあまり普及していないが、今後の普及促進が期待される。

65歳到達者を100人とした場合の年齢別死亡数の推移（男性）



生まれ年	1900年	1910年	1920年	1930年	1940年
死亡数が最多となる年齢	74歳	80歳	85歳	86歳	88歳
死亡数最多年齢での死亡数	4.20人	4.17人	4.01人	3.87人	3.96人
平均死亡年齢（65歳到達者）	78.0歳	80.0歳	81.8歳	82.9歳	84.2歳
標準偏差	8.1歳	8.5歳	8.9歳	9.3歳	9.4歳

（注1）実線部分は簡易生命表を基礎とした実績、点線部分は将来人口推計の生命表（死亡中位）を基礎とした予測。簡易生命表や将来人口推計に記載の死亡率に加え、(完全)生命表を使って簡易生命表や将来人口推計に記載以上の年齢の死亡率を推計して作成した。

（注2）図が見づらくなるため1950年生まれは割愛した。1950年生まれは1940年生まれと1960年生まれの間に位置する。

（資料）厚生労働省「簡易生命表」（各年）および「生命表」（各回）、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口 一平成18（2006）年12月推計」